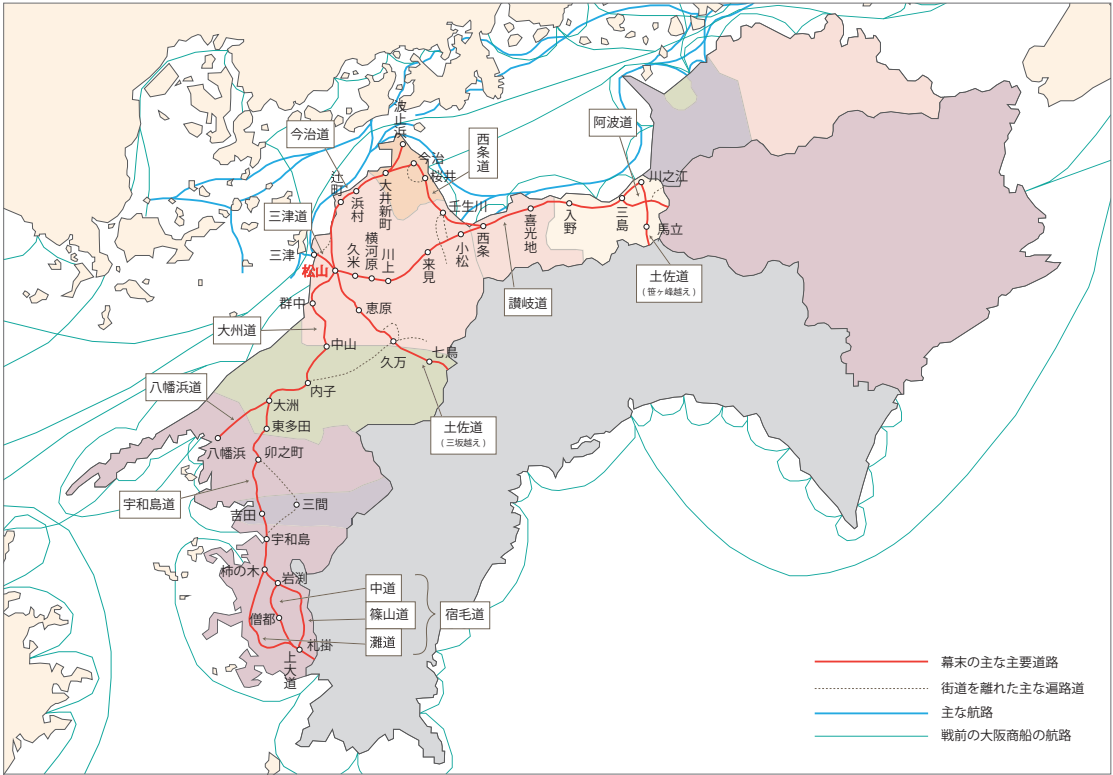


1.1 城下町の構造



江戸時代の四国・愛媛の陸路と航路
(国土地理院白地図をもとに作成)

（１）加藤嘉明の描いた松山城

１）松山城建設地の選定

松山城形成前は、道後湯築城周辺がこの地方の中心であった。1600(慶長5)年、関ヶ原の戦いで豊臣秀吉のもと功績を挙げた加藤嘉明は、松山に新たな城と城下町の形成を命じられる。加藤は新たに築城する土地の候補を、第1候補を「天山」、第2候補を「勝山」、第3候補を「御幸寺山」として幕府に申請した。

「天山」は、2つの水系に囲まれ、交通や物流の面に優れ、平野の奥地にあるため、海からの侵入が難しいなどの利点があった。一方「勝山」は、湯山川の流路が近く、広い平地が取れないことや湯山川の氾濫が多かったことより、一見恵まれない立地に見えるが、海の玄関口である三津浜に近いことや中世の城であった湯築城に近いことなど、城下町形成においては大きなメリットのある場所でもあった。

結果として、第2候補であった勝山への

築城許可が下りることとなった。当時は幕府に申請した場所のうち第2候補に対して許可が下りることが多かったため、加藤は一番築城をしたい「勝山」をあえて第2候補として申請したといわれている。

２）治水・利水のための水路網開発

当時、勝山（現在の城山）の麓には湯山川（旧石手川）が流れており、広大な平地は稲作地帯として使われていた。加藤嘉明の松山転入後、勝山に築城するにあたって、当時の湯山川は度々氾濫し洪水による被害が懸念された。そこで加藤は足立重信に河川の治水を命じ、重信は治水のために湯山川の流路を南に移すことを考えた。『松山市史』によると湯山川の元の流路は石手川の岩堰から湯築城の傍を過ぎ、持田村のほぼ中央部を横断し、城下の二番町・南堀端を流れ、三番町の妙清寺のあたりを通過し、西流して、吉田浜に注いでいたという。湯山川の改修には周辺の村人を動員した。流

路の変更は激務であるため、村人を奮起させるために村人に桶と鑿（のみ）を持たせ、桶1杯の岩と米1升を交換したといわれる。改修した湯山川の河川幅は改修前よりは狭くなり、深さはまだ浅かった。その後何度か氾濫が起こり河川が決壊した際に大川文蔵などによって河床を深くするなどの改善がなされ、現在の形状に至っている。その後の湯山川は城下町の外堀のような役割を持つとともに、河川から引いた水路によって城下町の運搬・農業用水・生活用水が確保され、城下町形成に欠かせない初期の土木工事となった。

３）街道と遍路道

松山城は、5つの街道によって他の地域と接続されていた。その5つとは、三津街道、今治街道、大洲街道、讃岐街道、土佐街道である。三津街道は、松山城建設地の検討において考慮された港町のある三津へと続く街道であり、特に重要な街道であったこ



松山藩の様子

(国土地理院 DEM、国土数値情報サービス（1/150,000）をもとに作成)

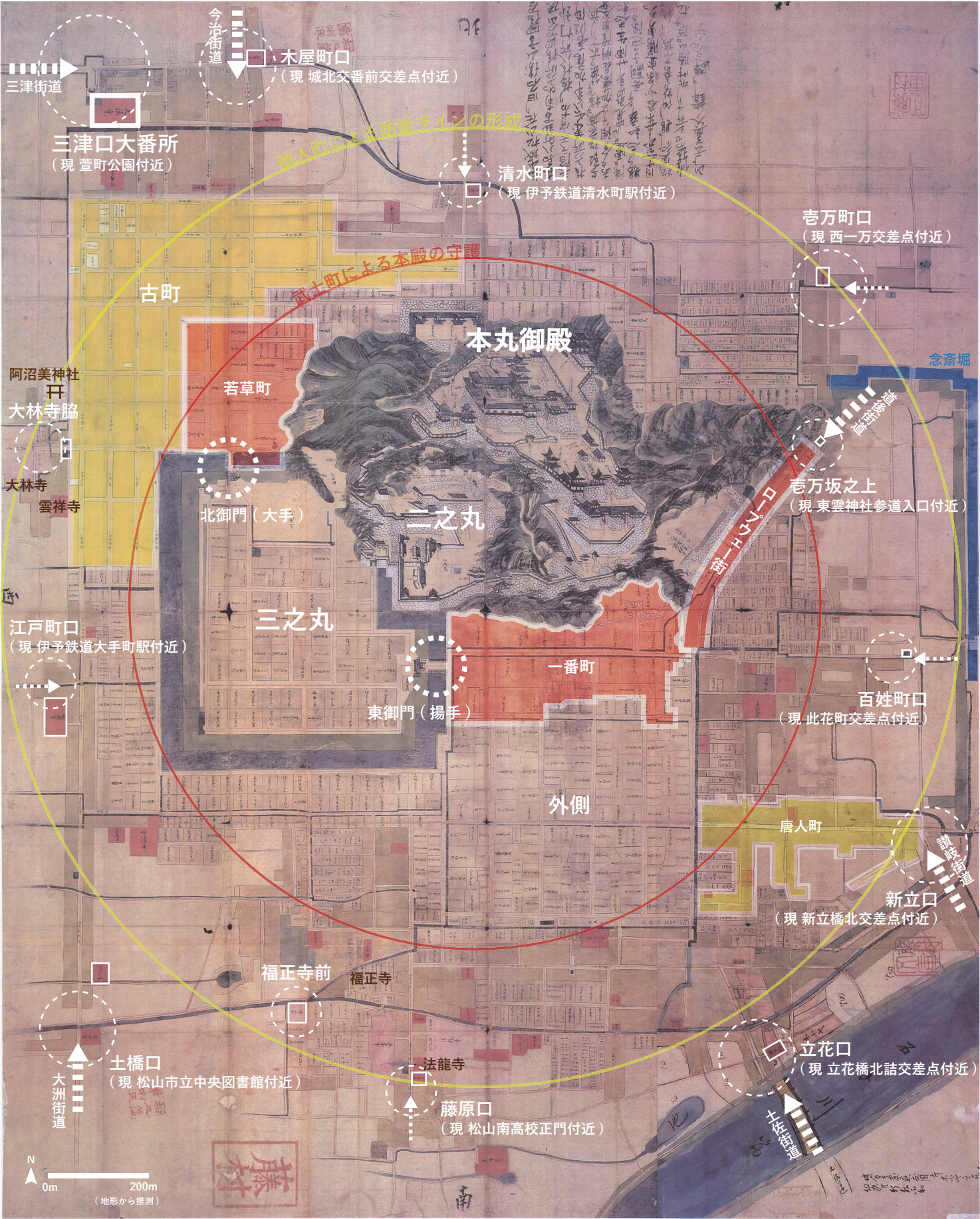
とが想像される。その他4つの街道は、それぞれ今治、大洲（南予方面）、讃岐（現在の香川県）、土佐（高知県）方面へと通じる道として機能していた。

また、古くから遍路道もあり、札所のある松山平野南部の方から道後の石手寺を経由して北部に抜けていく経路があったとされる。いずれも、道幅は当初約1間(1.81m)ほどでかなり狭い道であったが、だんだんと拡張されていったようである。

４）港町三津浜と城下町

城下町の形成時は物資の輸送には海運と水路を利用することが最も効率的であった。そのため、港町としての三津浜は大きく発達した。三津浜との物資のやり取りは河川を利用し、中ノ川から港町へと運び入れていたともいわれている。その他、陸路として重視されていたのは城下町入り口でもある三津口大番所であり、伊予国外の使者や大名、将軍などが海路を渡り三津浜から流

入する際に必ず通る場所であった。古町はその人たちを受け入れる場所であった。また、本町は彼らが城下に入るときに通った大通りでないかと考えられる。



	武家屋敷と考えられる土地
	町屋（水呑町・外巡町）と考えられる土地
	寺院・神社・お堂と考えられる土地
	城下町 13 の入り口
	街道
	その他の道

松山城下町宝暦図（1627 年頃）
の上に筆者加筆

（2）城下町の基本構造

1）本陣と武士町の配置

城下町の町割は、基本的に役職ごとに分けられていた。まずは勝山の頂上を平地にならし、そこに松山城を築いた一之丸、勝山の中腹には上級家臣居住区画の二之丸、山の麓に堀を作り、上級武士の居住地となる三之丸が松山城の中心構造であった。そして、これらの本陣を取り囲むように武士町が形成された。特に城山の接続口である山の北西（現在の若草町）、山の南（現在の一番町）、山の東（現在のロープウェイ街）などには信頼の置ける家臣を配置し守護に当てたとされる（左地図の赤塗り部分）。

2）商人町と城下の守護

また、正木（現在の松前町）や道後から商人を集めた商人街として古町・水呑町・外巡町などが整備された。特に、古町 30 町は当時の商業の集積地として繁栄した。一番町や南堀端より南には町人町を計画し、これらは現在の松山市中心部にあたる。その周辺（現在の大街道・銀天街）には、加藤が朝鮮遠征の時に連れ

（3）城下町の「際」

1）城下町の入口と番所

城下町の外郭には 13 の入り口が配置されていた。まず、城下の北東に三津口があり、反時計回りに大林寺脇、江戸町口、土橋口、福正寺前、藤原口、立花口、新立口、百姓町口、老万坂之上、老万町口、清水町口、木屋町口があった。特に、三之丸北側に位置する大手門に近い三津口は最も重要な入り口とされ、大番所が置かれた。与力・同心・番人（下級の武士や役人）ら 50 人が常時詰め、建物も大規模であった。その他にも町人が二人ずつ交代で詰める番所があり、主に火災や盗難を見張っていた。残りの 12 の入り口には仮番所が置かれ、中でも街道に接続する木屋町・土橋口・老万町口・立花口・新立口の六か所に公儀番所を設けることで旅行者の通行、商品流通の取締、移出入税徴収の関所とした。また、城下町と農村の接点で城下町商業の農村侵入を規制した。このように、城下町の内外は 13 の入り口によって厳重に警備されていた。

2）番所近くの宿町、水呑町

城下町の 13 の入口の番所周辺には、その門前に宿屋や商業町の発達する地域が多く、特に、規模の大きいものは三津口大番所や立花口にみられ、立花口近くに位置する二百人水呑町（現在の柳井町）も河原町の商家が繁栄するにつれて、町屋が増加していった。このように宿町や商業町として発達する地域の特徴としては、物資の輸入経路であったことや武装できる最後の場所であったことなどが挙げられる。



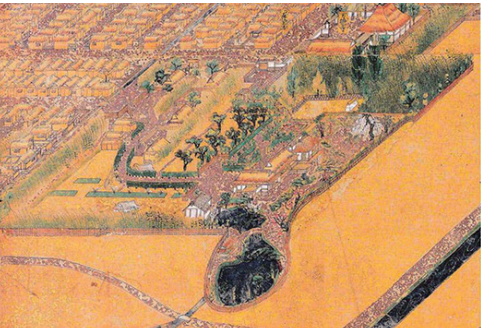
三津口大番所
『松山城下町屏風』（享保頃）より抜粋

てきた外国人を住まわせた唐人町が形成され、最南下は石手川によって守られていた。東の外郭には念斎堀も形成された。城の北側には守護の意味を込め、寺町が形成された。

松山城の築城は加藤氏・蒲生氏・松平氏と藩主を変えながら 26 年にも及んだが、前述の町割が変更されることはなかったという。

3）道路幅員

道路の幅員にも身分制・階級制が地域的に反映している。古町の町人街の中心本町筋が 2 間 1 尺（約 4m）、外側の永町（湊町）が 2 間 2 尺（約 4.2m）であるのに対し、武士居住区には階級差が明確に規定されている。高禄武士団の居住街区堀之内は四間三尺（7.5m）、北郭付近は 3 間（5.4m）～ 4 間 5 尺（8.7m）であった。このように、居住する武士の禄高に比例して道路の広狭が決定されている。足軽・中間の組屋街はいずれも 1 間幅（1.81m）と狭く、徒士の住む歩行町は幅 1 間 2 尺（2.41m）以上の道路はなかった。



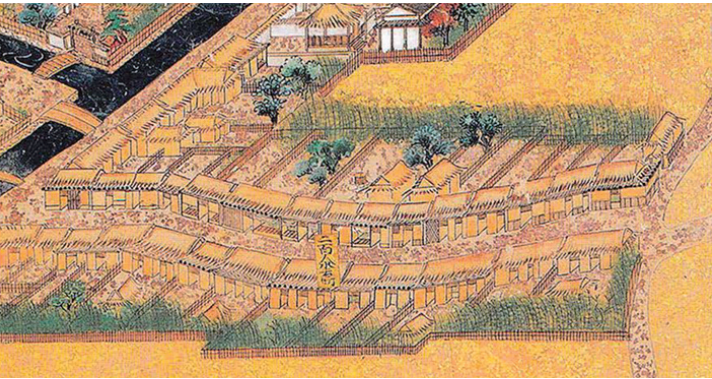
藤原御花畑
『松山城下町屏風』（享保頃）より抜粋

3）寺院の配置

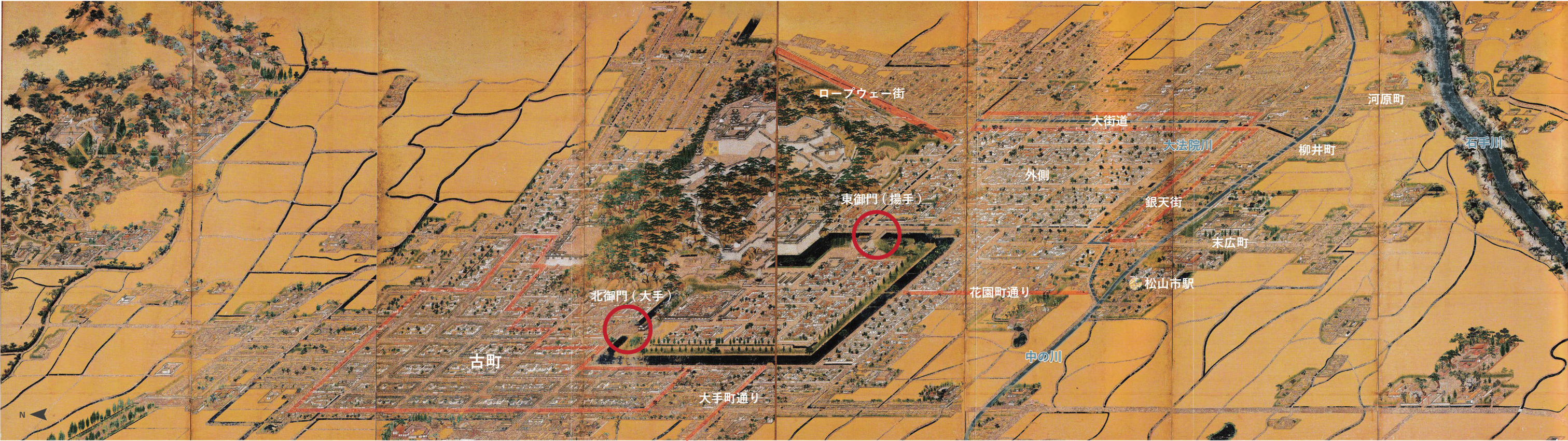
当時は焼き討ちや強襲に対処するために、武家屋敷や城下町を囲むように寺町が形成されていた。つまり寺院配置には軍事的な意図があった。城北防御ラインとしては、山越に道後から天徳・龍隠の二寺、松前から長建寺を移し、来迎・浄福・弘願・不退・千秋・御幸などの諸寺を建立して寺町を形成し、西山の丘陵の寺社群で支那防御ラインを構築していた。

4）庭園の立地

上級武士は、松山城周辺に自宅を構えた。また、最上位の武士には、城下町外郭の周辺にいくつかの別荘地が与えられていた。現在の市駅周辺の「藤原御花畑」は現在の花園町の名の由来とされているが、池や林があって武士の療養に使われていたとされる。その他にも、「石手御花畑」、「正宗寺裏御花畑」、「道後御茶屋」などがあったといわれている。



二百人水呑町（現在の柳井町）
『松山城下町屏風』（享保頃）より抜粋



松山城下町屏風（享保頃）

（５）商人と職人の町 — 古町 —

１）古町の配置

古町は、加藤嘉明によって計画された商業地である。その立地は、経済的な発展を見越し、松山城の北西部、お城と物流の拠点である三津（港）を結ぶ動線上に配置された。またそれは同時に、海からの侵略に備えた防御上の砦として配置されたものでもあったとされている。

２）古町の形成

古町の役割は新たに建設された城下町に集住する家中侍たちのために、城下町に武器や日用品を製作する職人や、生活必需品を供給し、金融的な政策のできる商人を誘致することであった。そのため加藤は古町30町分の年貢を免除することでこれらの商人や職人を誘致した。この誘致された商人たちは松前や道後の商人たちであり、もともと加藤との繋がりや濃い人物たちであったと考えられている。古町の町の区分は同じ職業ごとに職業名を冠した町に集住させた。例えば手工業であれば鍛冶屋町、商業であれば米屋町といった具合に職業と町の名前が一致している関係は古町に限って見られ、城主からの恩典と経営の特権の関係が色濃く見られる。

中心街の本町・呉服町・松前町などの町家は構造も大きく、大商店・大旅宿の所在地で、城下町商業の指導層である問屋商人・御用商人、豪商栗田(廉屋)・曾我部(豊前屋)・

後藤・古川など金融業者、呉服屋などが町の美観を呈した。一方で、商店街が表通りに面したのに対し、社会的身分の低かった職人は裏町か町はずれに位置して同業者が集住した。特に、材木・荒物類は場末に多く、魚町は臭気の関係で裏町におかれた。地子免許の特権制は、城下町の繁栄と市街の膨張を無制限に拡大することを抑制した。

３）屏風に見る古町

屏風に残る古町の様子を見てみると、板葺き、柿葺き、瓦葺きの町屋が描かれており、瓦葺きの町屋は漆喰塗りの白壁をもち、格子窓を備えた町屋であることがわかる。このことから、まち全体として防火性を高めていたことがわかる。また、町家の規模は間口一間半から三間ほどのものが多く点在し、街角にあたる部分には間口が十間ほどもある商豪の屋敷も見られる。この大屋敷を持っていたのは大年寄といわれる町家の実権を握る人の屋敷であったと考えられる。町家は街区にまとまり、街路に対しては様々な暖簾が並び、腰を下ろして商談のできるスペースなども確認できる。また、街区の中には瓦葺き白壁の土蔵や住宅、樹木などが確認でき、これらの精密な描写からも周辺の賑わいが見て取れる。また、外巡町や水呑町には見られない建築の様式や敷地の広さから、当時は古町が城下町の中心部であったと考えることができる。



古町の街並み
『松山城下町屏風』（享保頃）p61より抜粋

（６）武士の居住地 — 外側 —

１）外側の形成

城下町建設当初、外側は町割の対象地にならなかったため、古町のような地子免許をもたなかった。しかし、外側が位置する城郭の南東地区は土地が広く、良好な居住条件と城郭防衛条件を備えており、将来的な発展条件を揃えていたといえる。また、藩士卒の多くがこの地域に集中居住しており、三の丸・一・二・三・四番町には藩邸・家老をはじめとする上級藩士の屋敷地があり、その周辺には町家と混在した下級藩士の屋敷組家、歩行・同心・足軽・中間の家があった。多くの藩士達は、日常生活必需品をはじめとする物資の購入や蔵米の販売などのために、侍屋敷地周辺に商家が立地することを望み、城下町草創の頃から寛文～延宝年間にかけて、隣接地域に自然発生的に永町（現在の湊町）・大唐人町を中心とする外側の町人街が形成された。

城下町創設当時には、一軒の商家もなかった外側地区が、年貢賦課という不利な条件であったのにも関わらず、約半世紀後には古町地区と並ぶほどの町づくりが進んだ。しかし、城下の繁栄の中心は、豪商や一流商店の多かった古町地区にあった時期が続いた。また、古町が町割によって整然とした町並みを形成しているのに対し、外側はいわば自然発達による粗雑な空間構造であるのが特徴といえる。

２）武士町の構造

松山城下の武士町は二の丸には最上級の武士、加藤らの直属の家臣、三の丸には上級武士、城山の各入り口には家臣クラスを住ませた。また、武士町は南堀端、一番町にも展開した。町人街には下級武士や商人が住んでいた。城下町の七割を占拠した武家屋敷の構造は、中世在地の土豪層の家敷構えで連続し、構成方式は寺社・農家と類似し建蔽率が低い。武家の総戸数約450（100石以上）軒中、71軒が堀之内と番町界隈で総軒数の60%を占め、残り195軒が他地域に散在し、2000石以上の重臣層が城郭の四囲を固めた。

武家屋敷と町家は並列的であるが、上中級の武家屋敷は大半が、外側の良質な飲料水と高燥で日当たり良好な城南地区を住宅地区に占拠した。それに反し、下級の徒士・同心・足軽組屋敷や水呑町は、城下町の際に形成され、棟割長屋の組屋敷と町家が雑然と密集した。

参考文献

- ・松山市史編集委員会（1997）『松山市史第二巻』、松山市
- ・愛媛県史編さん委員会編（1986）『愛媛県史近世上』、愛媛県
- ・愛媛県史編さん委員会編（1987）『愛媛県史近世下』、愛媛県
- ・建設省四国地方建設局松山工事事務所（1981）「松山市道路網発達調査報告書」
- ・金井年「役負担からみた近世都市プランの考察」、歴史地理学会、(133)、pp.2-21、1986
- ・データベース愛媛の記憶 <https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode/2/31/view/4440>
- ・城郭放浪記、愛媛県松山市のお城一覧 <https://www.hb.pei.jp/shiro/ehime/?c=matsuyama>
- ・枯雑草の巡礼日記 https://blog.goo.ne.jp/karekusa_2005/e/c5c50b4695ff8bec16bfda3d6a8e727d